

重要な他者との関係性からみる高齢者の死のイメージ

川本智映子・岡本祐子

The image of the death of the elderly people from the viewpoint of the relationship
with significant others

Kawamoto Chieko and Yuko Okamoto

本研究は、高齢者にとって死を考える上で重要となる他者との関係における死のイメージについて検討を行った。その結果、重要な他者が子どもの場合には、子どもに対して「役割を託す」「繋がりを感じる」関係性、死のイメージとして次の生への視点が見出され、子どもの中に自分の存在が内在化され、死を迎えた後にも重要な他者と繋がる感覚を有していることが示唆された。重要な他者が配偶者の場合には、「生きがい」「支えあう」関係性、死のイメージとして次の生への視点のみられた。重要な他者が親の場合には、親から託された「役割を引き受ける」関係性、肯定的な来世のイメージのみられた。重要な他者によって異なる関係性と死のイメージが存在することが示された。

キーワード：高齢者、死のイメージ、重要な他者

問題と目的

1) 高齢者が望む終末期のあり方

現在日本は、高齢社会を迎えており、高齢者の人口は全人口の約 23.3%を占めている (内閣府, 2012)。さらに高齢者人口の増加に伴い、死亡者数も増加を続けると予測されており (内閣府, 2012)、この現状を踏まえて高齢者の終末期の迎え方が重要な課題となっている (彦・田島, 2011; 木内・吉田, 2004)。このことから、高齢者の望む最期の在り方を理解するために、どのような場所で死を迎え、どのように最期を過ごしたいかといった検討が行われている (e.g. 平川・益田・葛谷・井口・植村, 2006)。しかし、彦ら (2011) は高齢者が望む死を迎える場所や、最期に対する想いの背景には、高齢者が死に対してどのように向き合っているのかという、死の捉え方や死のイメージが背景にあると示唆しており、高齢者が捉える生と死を理解する必要性を指摘している。終末期をいざ迎える高齢者の希望を理解し、よりよい支援を行う上で、高齢者が生や死をどのように考え、死をどうイメージしているかを理解する必要があると考えられる。

2) 高齢者がもつ死のイメージについての概観

これまで、高齢者の死のイメージに関する研究として、他の世代と比較したもの (e.g. 堀, 1996)

や、死のイメージに影響を与えると考えられている性別 (e. g. 青木, 2000) , 健康状態 (e. g. 針金・河合・増井・岩佐・稲垣・権藤・小川・鈴木, 2009) , 死別経験 (e. g. 伊藤・松岡, 1993) , 家族の存在 (e. g. 針金ら, 2009) や、宗教への信仰 (e. g. 伊藤・永崎・一柳, 1991) などの側面から検討が行われている。

健康状態に関しては、健康度が高いと死に対して肯定的なイメージをもつことが示されている (e. g. 針金ら, 2009) 。伊藤ら (1991) によると、主観的健康感が高いと感じている方が、死を「精神の再生」「人生の新たな始まり」と発展的に捉えている。さらに、杉山・方波見・中野・阿部・竹川・中村・佐藤 (1986) の既往歴および現在の疾病と死の捉え方との関連を明らかにした調査では、抱えている疾病の特徴によっても高齢者がもつ死のイメージは異なることを示している。

死の捉え方に影響を与える要因として、身近な人との死別経験も含まれる (e. g. 伊藤ら, 1993) 。身近な人との死別経験がある場合、死を積極的に受容する傾向 (河合ら, 1996) や、他者の臨終に立ち会ったことのある場合は、ない場合と比較して生きがいを感じ、死に対して肯定的な見方になる (杉山ら, 1986) という報告がある。さらに、死別する相手は家族や友人など高齢者にとって重要な他者であることが推測される。そこでこの重要な他者に焦点をあてて、重要な他者の死を想定した際の死の捉え方と、高齢者自身の死を想定した際の死の捉え方を比較したものがあある (小谷, 2008) 。その結果、高齢者にとって自分自身の死よりも重要な他者の死の方が考えたくないという傾向があり、また自分自身の死は消滅を意味するが、重要な他者の死には次の生への期待を示すことが見出された。このことから、重要な他者が与える死の捉え方への影響の大きさが推測される。

家族の存在もまた、高齢者がもつ死のイメージに強い影響を与える要因の一つである (e. g. 針金ら, 2009) 。家族の存在が生きるはり合いを高めたり、死の怖れを低減させることと関連しており (河合ら, 1996) , 短命の期待を防止している (黒田・青木・井上・久泉・山田・秋山, 1994) ことが示されている。また最期に看取りをしてもらいたい相手として、家族をあげている (e. g. 田中・岩本, 2002) ことから、高齢者にとって自分自身の死と家族の存在は切り離せないものであり、同時に高齢者の生に意味を与えるものであることが考えられる。

3) 高齢者がもつ死のイメージ研究の課題

川島 (2005) は、高齢者の死に対する意味づけには、特に「家族の存在」「身近な者の死」「健康状態」が大きく影響を与えると述べている。また、彦ら (2011) は、高齢者の多くは社会との接点は人との繋がりから生を考え、その過程において自分自身の死について考えると述べている。例えば、終末期は家族に迷惑をかけずに死を迎えたい (木内, 2004) ことや、死に対する思いについて家族などと語りたい (酒井, 2008) こと、さらに生きる意味を探す過程においても家族の中における自分の存在を高齢者がどう感じるかが重要である (沖中, 2006) 。さらに近藤 (2010) は、緩和医療の現場で死が人の人生においてどのような意味をもつのかについて検討を行い、その中で死に逝く人とその周りにいる他者とが築き上げる関係の意味から死の意味を捉えている。近藤 (2010) はこの中で、人の生と死について、人・もの・出来事、特に死に逝く人とその周りの他者との関係の視点から論じる必要性を述べている。高齢者と重要な他者との関係について、例えば高齢者が自分の死に対する思いについて家族と安心して語れるような関係や、すでに重要な他者が亡くなった後

もその人との関係が続いていると感じることにより、自らの死に対して肯定的に捉えるものと推察される。一方で、家族の中に自らの居場所を感じるができない状況であったり、過去の重要な他者を看取る過程においても、遺された高齢者がその過程に満足していない場合、自分自身の最期にも肯定的な意味づけが難しく、死に対して否定的なイメージをもつ可能性が推測される。つまり家族であれ故人であれ、高齢者にとって重要な他者との間で高齢者がどのような交流をし、重要な他者をどのように捉えているのかといった部分が、死の捉え方においてより重要である。

さらに死のイメージを捉える研究の問題点として、生のイメージの視点の欠如があげられる。これまで高齢者の死のイメージに関する研究は、主に死に焦点を当てて検討されているものが多い(e.g. 河合ら, 1996)。しかし日本には、生死一如という言葉があるように、生と死は切り離すことができないものであり、死について考えることは生についても考えることでもある(堀江, 2007)。

以上のことから、本研究は①高齢者の「重要な他者」との関係の捉え方の特徴、および②それぞれの「重要な他者」別に死のイメージを明らかにすることを目的とした。また、先行研究では家族は配偶者など関係性を狭く捉えているため、本研究では重要な他者の概念をより広く捉えることとする。さらに、死のイメージの背景にあると推測される、生のイメージの抽出も試みる。死のイメージの理解に他者との関係という新たな側面を呈示するとともに、高齢者自身にとってより満足いく死の準備へのよりよい支援の方法を示唆できると考えられる。

方 法

実施時期 2012年7月～9月調査

調査協力者 68歳～98歳の健康な高齢者男女8名。各協力者のプロフィールをTable 1に示した。

倫理的配慮 調査への協力依頼にあたり研究へは自由参加であり、調査協力および中断は任意であること、協力の可否に関わらず不利益は一切ないことについて口頭および書面にて説明した。さらに記録には筆記による記録とICレコーダーを使用すること、得られたデータは厳重に保管すること、研究結果の公表に関しての承諾を得た後、面接承諾書に署名をしてもらった。なお、本調査は広島大学大学院教育学研究科倫理審査委員会に倫理審査の承認を得た。

調査手続き 個別の半構造化面接を行った。面接時間は、60～150分であった。面接場所は協力者が落ち着ける場所(公共の会議室や自宅など、得られた情報を守秘できる個室)で行った。

調査内容 本調査では、協力者の年齢、家族形態、居住形態、既往歴について尋ね、その後「死を考える上で重要になると思う人物はどなたですか? また、その人と死についてどのようなやりとりをし、その中で死のイメージはどのように変化したかについて、教えてください」と教示をし、自由な語りを得た。重要な他者との関わりの中での実際の死についての話やその関わりの中で変化する死のイメージについても質問した。質問項目は隈元(2009)を参考に質問項目を作成した。

分析方法 調査協力者8名を対象に、重要な他者の捉え方および死のイメージの特徴を捉えるために以下の分析方法を用いた。

(1)重要な他者の捉え方

前盛・岡本(2008)を参考に、死を考える上で重要な他者に対する捉え方の特徴を明らかにする

Table 1 対象者のプロフィール

年齢・性別	職業	家族構成	面接時の健康状態・既往歴
A 75歳(女性)	無職	夫(死亡), 息子(他県に別居), 娘(近隣在住)	糖尿病
B 75歳(男性)	喫茶店営業	妻(Bが30代の時に離婚), 息子(他県に在住)	最近がんが発覚し, 近日中に手術を受ける
C 81歳(女性)	無職	夫(死亡), 息子(息子夫婦と同居), 娘(同県在住)	いくつかの慢性疾患を抱えているが現在は小康状態
D 76歳(男性)	無職	妻(F), 息子(同県在住)	健康
E 98歳(女性)	無職	夫(死亡), 長男(同居), 娘2人(F・G近隣在住)	健康(Fからの情報では, 現在息子夫婦と同居。生活はほぼ自立している)
F 73歳(女性)	無職	夫(同居), 息子(同県在住), 原家族としてG・H	健康
G 68歳(女性)	無職	夫(H), 息子2人(長男は近隣在住, 二男は近県在住), 娘(近隣在住), 元家族としてE・F	健康
H 68歳(男性)	無職	妻(G), 息子2人(長男は近隣在住, 二男は近県在住), 娘(近隣在住)	健康

ために、対象者があげた重要な他者別に以下の手順を用いて分析を行った。

- ① 重要な他者との関わりやそれに伴う感情に関連する語りを全て抽出した。
- ② ①で抽出した語りの中から、各対象者において主要な考えとなる17の語りを抜き出した。
- ③ ②の語りの中で、類似した意味内容と思われる語りについて、対象者間でグループ化を行った。具体的には、1)重要な他者との関わりの内容、2)重要な他者に向けた感情、という2つの基準による。類型化の結果、4つに集約され、この時得られたグループを重要な他者の捉え方の特徴とした。
- ④ さらに③で得られた4グループの特徴を見出すために、グループごとに①のすべての語りに関して、類似した意味内容をもつものを分類し、カテゴリ化した。こうして得られた語りを、重要な他者に対する捉え方の下位カテゴリとした。類型化の妥当性を検討するため、臨床心理学を専攻する大学院生1名が独立して評定を行った結果、評定者間一致率は96.0%であった。評定が一致しない項目は、評定者間で協議のうえ、決定した。

(2) 死のイメージ

死のイメージの特徴を明らかにするために、前盛ら(2008)を参考に分析を行った。なお、分析は1)死のイメージ、2)死後のイメージ、3)希望する死の迎え方を基準に行った。82の語りが抽出され、類型化の結果、5つのグループに集約された。このとき得られたグループを死のイメージの各特徴とした。類型化の妥当性を検討するため、重要な他者の捉え方と同様に評定を行った結果、評定者間一致率は93.9%であった。評定が一致しない項目は、評定者間で協議のうえ決定した。

結果と考察

1) 重要な他者の捉え方の特徴

死を考える上での重要な他者の捉え方の特徴を明らかにするために類型化を行った。その結果、重要な他者が子どもの場合には【役割を託す】【支えあう】【将来のイメージ】【繋がりを感じる】、配偶者の場合には【支えあう】、親の場合には【先に見送る】【役割を引き受ける】、友人の場合には

【関係の維持】の7グループが見出された。なお【 】は大カテゴリー，[]は小カテゴリーを示す。

1)-1 重要な他者が子どもの場合

重要な他者が子どもの場合には、【役割を託す】【支えあう】【将来のイメージ】【繋がりをを感じる】が見出された (Table 2)。【役割を託す】とは、現在高齢者が担っている仕事や、自分の使命だと感じていること、または高齢者自身が死を迎えた際の葬式の希望などについて、子どもに託したり引き継ぐ相手として捉えていることが特徴である。「墓の管理を任せられる(対象者 H)」のようにこれまで担ってきた仕事や役割を託したり、「自分が死んだら連絡するところを教えている(対象者 C)」と死を迎えた際の希望を伝えたりするなど、高齢者が自分自身の死を予測した上で、これまで積み重ねてきたものを後世に残そうとしている状態である。

【支えあう】では、高齢者が自分自身の死を見越して、子どもと共に死を迎える準備に取り組んでおり、実際に子どもとの関わりが見られることが特徴である。これには[役割を通した相互交流][希望する死の迎え方の実現に取り組む][人生の満足に協力する]が含まれている。[役割を通した相互交流]とは、[役割を託]された子どもが、高齢者の意志を組みこれまで高齢者が担っていた役割を果たしている状態である。役割を引き継いだ子ども自身も、さらに役割を全うするため高齢者との交流を続けており、役割を通じた高齢者との相互交流が見られる。[希望する死の迎え方の実現に取り組む]は、「死んだ時に知らしてほしい人を書くよう言われた(対象者 C)」のように、子ども自身が高齢者がどのような死の迎え方を希望するのかを理解するために働きかけていることが特徴である。これと類似したものとして、「今を楽しんで(対象者 A)」のように、現在の生をより充実させるために働きかける[人生の満足に協力する]がある。

【将来のイメージ】は、高齢者が死を迎えた後の子どもの将来をイメージすることであり、これには親としての視点で語られていることが特徴である。親として「社会人らしい人になって欲しい(対象者 A)」と願う[期待]や、今後生活していけるかどうかを[心配]すること、また先に死に逝く者として子どもと離れてしまうことに対する[寂しさ]がある。いずれも高齢者が死を迎えた後の子どもの将来について語られたものであり、心理的繋がりの変化を意識していると考えられる。

【繋がりをを感じる】は、高齢者の死後も子どもとの思い出を共有することで繋がりを感じていたといったことが特徴である。心理的な繋がりのや、子どもの中に自分の存在を実感する「子どもと同じ想いのところがある(対象者 A)」や、「自分が死んだ後も子どもの成長の様子をアルバムをみて分かるように整理している(対象者 C)」のように高齢者と子どもとの思い出を共有することで、高齢者の死後にも子どもの内的世界との繋がりをを感じる状態である。

1)-2 重要な他者が配偶者の場合

重要な他者が配偶者の場合、【支えあう】【生きがい】が見出された (Table 3)。[支えあう]は、配偶者と共に希望する死の迎え方を相互に理解し、実現できるように取り組むことが特徴である。[生きがい]は、「夫といるから生きていて楽しい(対象者 G)」など、重要な他者と共に生きることに意味を見出していることが特徴である。

1)-3 重要な他者が親の場合

重要な他者が親の場合、【先に見送る】【役割を引き受ける】が見出された (Table 4)。[先に見送

Table 2 重要な他者の捉え方の特徴（子どもの場合）

特徴	定義	具体例
役割を託す	現在高齢者が持っている仕事や、死を迎えた際の葬式の希望を重要な他者に引き継ぐ	<p>[役割を託す] : H お墓を守る人は、本人もそういう教育していかないけんという事で。今のところ見る人がいなくなったとかいうのは、今のところは大丈夫と思ってるんですけど。まあ安心して任せられるなっていう想いはありますね。(H)</p>
支えあう	高齢者の死を見越して重要な他者と共に死を迎える準備を取り組む	<p>[役割を通した相互交流] : H まあ特に命日の時は、必ずお墓参りをしてくれとか、子どもの方からメールで送ってきて。(H)</p> <p>[希望する死の迎え方の実現へ協力] : C 娘が書いときんさいって、(エンディング)ノートくれたんです。(C)</p> <p>[現在の人生の満足に協力する] : A 子どもらが“ママ今が老後やから今を楽しくしんさい。死んだらしまいやけ”って言うてる。(A)</p>
将来のイメージ	高齢者が死を迎えた後の重要な他者の将来を親の立場からイメージする	<p>[心配] : A いなくなった場合は、やっぱりこの社会の荒波で生活していけるかなとか心配やし。(A)</p> <p>[期待] : A 社会人らしい人でおってほしいなって思うし。自分らしく生きてくれる人が好きやわ。(A)</p> <p>[寂しさ] : 高齢者が自身を先に死に逝く者として、子どもと別れることへの寂しさを感じる B だから死ていうのは、孫の将来は見えないっていうのは、ある意味で恐怖ですわ。見たい、けど見れない。</p>
繋がりを感ずる	死を迎えても重要な他者との思い出を共有しようとする	<p>[繋がりを感ずる] A, C 私は死んだら子どもに執念じゃないけど、念は残ると思うてんねん。同じ想いのところはすごいあるし。私が死んでもうちの娘は同じようなことすると思う。同じような考えやし。(A)</p>

る] は、親を年齢的に死に近い人として捉えていることであり、自分自身の死よりも親の死を見送ることを優先して考えていると推測される。[役割を引き受ける] は、親がこれまで担ってきた役割や仕事を、自らを子どもの立場として引き受けることである。

1)-4 重要な他者が友人の場合

重要な他者が友人の場合、【関係の維持】が見出された (Table 5)。「友達といさかいを起こすことはない(だから死について考えることはなかった)」(対象者 E)のように、死との関連性は見出されなかった。

2) 死のイメージの特徴

死のイメージの類型化を行った結果、死のイメージには【表裏一体】【次の生への視点】【死への感情】【希望する死の迎え方】【生への志向】の5グループが見出された (Table 6)。

まず、【表裏一体】は、生と死を同質のものとして捉えていることが特徴である。「死ぬことは生きること」(対象者 H)や、「人生観と死観は一緒(対象者 B)」などは生と死を切り離さずに表裏一体のものとして捉えており、生きることと死ぬことに繋がりを見出していると推測される。

Table 3 重要な他者の捉え方の特徴（配偶者の場合）

特徴	定義	具体例
支え合う	重要な他者と協力し、希望する死の迎え方を実現できるように取り組む	[希望する死の迎え方の実現へ協力する] : D, G ちょっと体調がおかしい時は早めにお医者に行って診てもらおうにね。これは家内と言い合っておりますけどね。(D)
生きがい	重要な他者が生きていることが高齢者の生きる意味となる	[生きがい] : G 生きてるっていうのは、主人と一緒にいるから生きてて楽しい。(G)

Table 4 重要な他者の捉え方の特徴（親の場合）

特徴	定義	具体例
先に見送る	高齢者自身の死よりも、先に死を迎えると予測される人として捉える	[先に見送る] : F 1年1年やっぱり死に近くなるけど。まだなんか、80まで生きればあれだけ80になったら1年1年。死は知らぬ間にほんと。まだ母の方があって、自分の死の方はまだって。
役割を引き受ける	重要な他者から託された仕事や役割を引き受ける	[役割を引き受ける] : F そうなるとなんかやっぱり色々気になることやら、そういうところには自分の体の方がね。やっぱり、70になったら、私もその畑を、朝母がなかなかもうできないから。

Table 5 重要な他者の捉え方の特徴（友人の場合）

特徴	定義	具体例
関係の維持	良好な関係の維持に努める	[関係の維持] : E 友達といさかいを起こすこともなかった。自分が心を痛めることだから。(E)

【次の生への視点】は、あの世や来世に対する肯定的または否定的態度である[生まれ変わり][あの世・来世の肯定][あの世・来世の否定]、遺された人の中に故人との思い出やイメージが残り続ける[後世に残る]が含まれる。[生まれ変わり]には「また来世がある(対象者 C)」といった生まれ変わることへの明確なイメージをもつものや、[あの世・来世の肯定]には「あの世はあるかもしれない(対象者 F)」などの死後の生を示唆するものが見られた。これらに類似するものとして、故人との生前の思い出が遺された人の中に残り続けるものとして[後世に残る]が考えられる。一方でこれらと対極なものとして[あの世・来世の否定]があげられる。これは「生まれかわりは信じられない(対象者 B)」と、生まれ変わりを否定するものである。しかし対象者 Bのように、肯定と否定が併存する場合もある。あの世や来世が「あるかもないかも分からない(対象者 B)」と語られているように、あの世や来世の存在を確信できないために両価的な態度が現れている。その背景には、

Table 6 死のイメージの特徴

様態	特徴	具体例
表裏一体	生と死を同質のものとして捉える。	[表裏一体] : B, H やっぱ自分が息を引き取らんとわからん違うのかな。っていうのが死観。ひっくり返したら、人生観。人生観と死観は一緒なんですよ、掌の裏と表(B)。
次の生への視点	あの世や来世に対する態度や、遺された人の中に死者が生き続ける	[生まれ変わり] : A, C じゃけど、私らは人間として生まれる軌道がきちっとできているから。(C) [あの世・来世の肯定] : A,B,C,F,H (霊を見たという体験を)後から考えると、自分自身の中ではやっぱり後世って言いますかね。そのへんの世界があるんかなって思いますよね。(H) [あの世・来世の否定] : A, B あの世はないと思う。(A) [後世に残る] : A, G, H 死んだ人のことか思ったら、やっぱり人には良くしなないと思いますよね。やっぱり亡くなっても、色々世話になったとかああいう人ってすぐ頭に残りますよね。(G)
死への感情	死に対して持つ感情。相反する感情が同時に存在する場合もある。	[安心] : C, H 死のことについてはそんなに暗いイメージじゃない。(C) [疑問] : A, H ただ死ぬ時に脳が働いていたときは、例えばいろんな死の恐怖とかどうなるんだろう。(H) [不安・恐怖] : D, F, G, H 不安は不安ですよ。(G) [抵抗] : B, G 死についてあまり考えたくないです。(G) [ショック] : G, F 70歳になった時はすごいショックで。(F) [希望と不安の葛藤] : G 死ぬのはね、自分で思うように死ねたらいいですけどね。そうもいかないしね。(G) [客観視] : D, F, H みんなそれぞれ生まれてくれば、死ちゅうのが、年数が違うか分からんけどね、いつかは誰でも来るのは来ますよね。(D)
希望する死の迎え方	どのような死を迎えたいかについてイメージする。	[身体の希望] : C, D, F, H 死ぬ時は苦しまんと、心筋梗塞みたいな、あつと死んだらええなって思いますよね。(D) [人生の満足] : G, H 最後が一番、ああよかったなって思って死ぬことをね、目指して。今までよかったけど、最後でダメだったっていうのが一番あれなんですよね。最期に笑って死ねたら一番幸せだなんていうことは感じてますけれどね。(H)
生への志向	死を考えるよりも、生を考えたいといった、これからどのように生きるかを積極的に考えようとする。	[生への志向] : A, B, G, F, H 死はそれは終焉するんじゃないけど、その中で死ぬまでに何をして、自分はこの生まれてきて何のために生きてきたのか。(H)

死に対する不安や死をいずれ来るものとして受け入れようとしていることが考えられる。

次に【死への感情】は、死に関して抱く感情であり、単一の感情だけではなく、相反する感情が同時に存在する場合もあることが特徴である。死への感情として、[安心][不安・恐怖][疑問][抵抗][ショック][希望と不安の葛藤][客観視]が含まれる。[安心]とは、「成仏するように死んだ

人を見た(対象者 C)」といった穏やかな死を看取ったり、「先祖供養をする人がいるので、今後の心配をしなくていい(対象者 H)」のように思い残しが少なくなったことにより、死に対しポジティブな印象をもっている状態である。[希望と不安の葛藤]とは、「どんな死を迎えたいかといった希望はあるが、実際にはそのようにはできないのではないか(対象者 G)」のように、希望する死の迎え方を想像するが死に対してのネガティブなイメージも同時に持つために、それが叶わないのではないかとといった不安に繋がっていると推測される。[死への感情]には、看取りの経験や[あの世・この世の肯定]または[あの世・この世の否定]といった他の死のイメージによる影響が考えられる。

【希望する死の迎え方】は、高齢者がいずれどのような死を迎えたいかについてイメージしたもので、[身体的な希望]と[人生の満足]を求めたものが含まれる。[身体的な希望]は、「コロっと逝ければいいね(対象者 C)」のように身体的な苦痛を伴わずに死を迎えることを希望している。[人生の満足]には、「死ぬ時に自分の人生をよかったと思って死にたい(対象者 H)」のように、人生のより良い完結を望む状態である。これは、木内・吉田(2004)の高齢者の終末期の希望を概ね裏付けるものであり、高齢者の終末期に関して死ぬ時だけでなく死を迎えるまでの過ごし方の希望が見られた。

【生への志向】は、「死について考えるよりは、生きることを考えたい(対象者 G)」のように、死を考えるよりも生を考えたいといった、今後どのように生きるかについて積極的に考えようとすることが特徴である。

3) 重要な他者の捉え方と死のイメージの関連

次に、死を考える上で重要となる他者の捉え方ごとに、死のイメージの特徴との関連について検討した。その結果、重要な他者を子どもとした場合には、子どもとの繋がりを感じ、次の生への視点を持った死のイメージを持っていること、重要な他者を配偶者とした場合には、配偶者を生きがいとして捉えていること、重要な他者を親とした場合には対象者自身が子としての立場に立ち、親との繋がりをもちつつも、自分自身と死との間に距離を感じているといった特徴が見出された(Table 7)。以下、典型例と思われる対象者の語りをもとに、重要な他者の捉え方が死のイメージとどのように関連しているかについて、重要な他者別に考察したい。

3)-1 重要な他者を子どもとした事例

【対象者：Hさん】

重要な他者

先祖の供養をすることは自分の仕事だと思っている。そのため、先祖の供養などを子どもに任せたいと思っており、子どもは供養を引き受けてくれ、また子どもとそのことについて話すことができる。子どもから積極的に話すこともあり、コミュニケーションはとれていると思う。さらに、子どももまた墓を残していきたいと言っている。そのため、先祖の供養ができないなどの心配事は解消されており「任せられるし、安心して亡くなってもいいかな」と思う。

死のイメージ

自分自身の死について、今まで考えたことはなかった。死の恐怖などはその場になってみないと

分からないし、今は死に対して不安などは持っていない。

意識がはっきりしていると、恐怖心やどうなるのかに対する不安、この先どうなるのだろう、死んだらどうなるのだろうといったことを思うので、歳をとったら意識ははっきりしない方がいいのではないかと思う。また以前霊を見た経験から、後世などの世界はあるのかなと思う。死は肉体的には減んでいくものであるが、その時に一生をよかったなと思えるような死に方がしたい。さらに、人には後世に命を繋げることであるという役割がある。自分の分身を次の世代につなげたら、それは死につながるし、死んだらその代が変わっていく。死はすなわち生であり、表裏一体のものとしており、「だから悲しむ人もおるけど、喜んでもいいんじゃないか」と思う。

重要な他者を子どもとした対象者は、重要な他者に対して【役割を託す】【繋がりを感じる】といった、死を迎えた後にも重要な他者と繋がる感覚を抱いている。それに対応して、「想いが後世に残る(対象者 A, H)」「自分が死んでも後世に続いていく(対象者 B)」のように、次の生への視点に関する語りが多く出現し、さらに【死への感情】として[安心]が見出されている。

対象者 H では役割を子どもに託し、さらに子どもが託された役割を担い、また時に子どもから高齢者に役割についての相談をされるといったことがなされている。このように、役割を託すだけでなく、役割を介した子どもとの密接な関わりを通して、かつて自身が担ってきた役割への手ごたえを得、またこれまでの成果が子どもに残ったという感触を獲ていることが推測される。

さらに、役割を介した子どもとの関わりに関して、「祖父母的生殖性」という Erikson の心理社会的課題の観点から述べたい。祖父母的生殖性とは、中年期の直接的な指導責任からは離れ、他者へ向けた外的な世話と、自己の内的な関心とを統合しようとしたものであり、現在の世話を次の世代の存続への関心に結びつける役割がある (Erikson, 1986 朝長ら訳 1990)。対象者 H では、これまで高齢者自身が担ってきた役割を引き継ぎ、さらに孫の世代に引き継がれようとされている。このように、役割を託しつつも未だ指導する責任を担い続けることで、今後も後世に役割を継承し続けることを促していると考えられる。さらに、このような役割が、死と向き合う絶望を乗り越え、人生の統合を促す不死の感覚の獲得を促進する (Erikson, 1986 朝長ら訳 1990) ことから、「安心して亡くなってもいい」「自分の分身を繋げる」といった、死に対してポジティブな態度が表出されたと考えられる。

3)-2 重要な他者を配偶者とした事例

【対象者：G さん】

重要な他者

重要な他者は夫婦のどちらかが先に亡くなった際には、遺された方は予防接種などの延命の努力はしないと話す。自分は夫と一緒にいるから生きていて楽しい。そのため自分だけ生き残っても一人では面白くないと思う。夫とは昔からの付き合いがあり、さらにお互いの考え方にもあまり差を感じておらず、非常に気が合っていると感じている。

死のイメージ

長生きしているが現在不遇な状況にある母親をみて、あまり長生きはしない方がいいのかと思う。

Table 7 重要な他者の迎え方と死のイメージ

	子ども(A,B,C,H)		配偶者(D,G)		親(F)		友人(E)
	大カテゴリ	小カテゴリ	大カテゴリ	小カテゴリ	大カテゴリ	小カテゴリ	大カテゴリ
重要な他者の迎え方	将来のイメージ(A,B)	心配(A) 期待(A) 寂しさ(B)	支え合う(D, G)	支え合う(D, G)	役割を引き受ける	役割を引き受ける	関係の維持
	支え合う(A,C,H)	現在の人生の満足に協力する(A) 希望する死の迎え方の実現へ協力(C) 役割を通じた相互交流(H)					
	繋がりをを感じる(A, C)	繋がりをを感じる(A, C)	生きがい(G)	生きがい(G)	先に見送る人	先に見送る人	
	役割を託す(H)	役割を託す(H)					
死のイメージ	次の生の視点(A,B,C,H)	あの世・来世の肯定(A, B, C, H) あの世・来世の否定(A, B) 後世に残る(A, H) 生まれ変わり(A, C)	次の生への視点(G)	後世に残る(G)	次の生への視点	あの世・来世の肯定	
	死への感情(A,B,C,H)	疑問(A, H) 抵抗(B) 安心(C, H) 不安・恐怖(H) 客観視(H)	死への感情(D,G)	不安・恐怖(D, G) 抵抗(G) 希望と不安の葛藤(G) ショック(G) 客観視(D)	死への感情	不安・恐怖 ショック 客観視	
	希望する死の迎え方(C,H)	身体の希望(C, H) 人生の満足(H)	希望する死の迎え方(D,G)	身体の希望(D) 人生の満足(G)	希望する死の迎え方	身体の希望	
	生への志向(A, B, H)	生への志向(A, B, H)	生への志向(G)	生への志向(G)	生への志向	生への志向	
	表裏一体(B, H)	表裏一体(B, H)					

過去の介護の経験などから自分の世話を人にさせたくないが、早く死にたいわけではない。亡くなった人のことをみたら、過去に世話になったことなどが頭に残るので自分も人にはよくしないといけないと思う。死についてどのように死ぬのかについて思わないことはないし、自分はどうなるのかなど思うこともあり「不安は不安」である。しかしどういう風に死にたいと思っても自分ではどうにもできないことであり、努力をしても叶うことではないと思う。死についてはあまり考えたくない話題であり、若くても歳をとっても死にたくない。死を考えるよりも生きることを考えたい。

重要な他者を配偶者とした対象者は、重要な他者に対して「支え合う」や「生きがい」を感じる相手として捉え、死のイメージとして「希望と不安の葛藤」や「後世に残る」が特徴的に見出された。まず、「希望と不安の葛藤」は高齢者が望む死のあり方と、実際に見聞きした死との間に大きな溝を感じている状態である。そのため、「こう死にたいと思っても、実際にはそうならない(対象者G)」といった希望する死の迎え方と、現実に見聞きしてきた死との間に溝を感じ、戸惑いが生じていると考えられる。

高齢者にとっての重要な人物について、小谷(2008)は高齢になるにつれて、配偶者が最も重要な人物になることから、その配偶者の死が遺される高齢者に与える影響の大きさを示唆している。その背景には、配偶者と共に老い、共に死を迎える相手として捉えていることが推測され、そのため配偶者の存在自体が高齢者の生きがいを支えていることが考えられる。さらに高齢者の場合、自らの死に対して必要以上の不安や恐怖を抱かない(小谷, 2008; 青木, 2000)が、配偶者の死の方が恐怖と感じており、また配偶者の死については考えたくないという意識が働いている(小谷, 2008)。対象者Gのように配偶者の存在を生きがいとして捉え、自分自身の一部として捉えている場合、配偶者の死はすなわち自分自身の死をも表すものとして捉えることが推測される。大切な他者である

配偶者を先に亡くすかもしれないという感覚は、高齢者自身の自分の死を直面させ、さらに配偶者の死といった生きる支えを無くすことに対する強い不安や恐怖を喚起させるであろう。この不安や恐怖を埋めるためにも、より穏やかな、満足する死を迎えることを期待する一方で、これまで実際に経験してきた死に関する経験との間に葛藤を抱くようになることが考えられる。

さらに、重要な他者を配偶者とした対象者の死のイメージとして[後世に残る]が見出されている。小谷 (2008) は、重要な他者と高齢者自身の死のイメージは異なると述べており、重要な他者は死んでも消滅しないが、自分自身は消滅するといった意識を持っていると述べている。このことから、重要な他者である配偶者の思い出が後世に残されていくといった来世に対する肯定的な見方が現れていると考えられる。

3)-3 重要な他者を親とした事例

【対象者：Fさん】

重要な他者

年齢的に死に近い親を考える。今まで親は元気になっていたが、最近になり弱ってきており、長くは生きられないと思う。親に関する思い出がたくさんある。しかし、歳をとったせいか、周りからかわいそうな扱いをうけているため、少しでも自分はよくしてあげないといけないと思う。今後も親の畑を世話をする必要はあるが、少しでも長く生きて欲しい。今のところ(自分を含めて)二人とも病気の多い病気もしていないため、夫と死の話をすることはない。

死のイメージ

これまで病気の多い病気や、身近に若くして亡くなった人がいなかったため死について考えたことはなかったし、「死にやいけん、ちゅうくらい」で考えたことはない。死に関する本を読んだこともないし、友達と話すこともなかった。自分が70歳になった時にはとてもショックであったが、さらに80歳になると思ったら「先がない」。1年1年死に近くなるが、死は知らぬ間にくるが、先に母の死があり、自分の死はまだだと思う。歳をとることは寂しいことであり、自分は元気なうちに死にたい。

重要な他者を親とした対象者は、重要な他者を「役割を引き受ける」と捉え、また死のイメージとして「あの世・来世の肯定」[ショック]が特徴的にみられた。Fさんの語りからこれまで親が担ってきた畑仕事を、娘である自分が受け継ぎたいといった内容が見られている。このことから、対象者が親との間で親子の関係を重視していることが推測され、仕事を受け継ぐことを通して対象者の中に親の存在を内在化しようとしていると考えられる。そのため、「役割を引き受ける」ことが親の存在を内在化することに繋がり、それが「あの世・来世の肯定」として現れていると考えられる。

さらに、重要な他者を親とした場合、【死への感情】として[ショック]が特徴的に見られている。この場合、年齢的に死に近いと思われる親を前提に死を考えているため、自分自身の死についてはまだ先のこととして捉えていると考えられる。そのため、「自分の年齢を考えるとショック。あつという間」と、改めて死を因る指標としての年齢を意識していると考えられる。

まとめと今後の課題

本研究では高齢者が死を考える上でどのように重要な他者を捉えているのか、そしてその捉え方と死のイメージの関連について検討を行い、その結果重要な他者との続柄によってその捉え方は異なることが示された。具体的には、高齢者と重要な他者が親子関係の場合、役割や仕事の継承が高齢者と重要な他者の間に互いの存在を内在化することに繋がり、その結果来世に対するイメージを肯定的にさせることが示された。また配偶者の場合には、共に死を迎える者として捉えており、自分の存在が後世に残るという死のイメージを抱く一方で、希望する死と現実の死との間に葛藤を抱くことが示された。

ほとんどの対象者にも重要な他者と繋がる感覚[繋がりを感じる][役割を引き受ける]や、互いの存在を必要とする[生きがい]など、死を見据えた関わりがみられ、さらに死のイメージとして〔後世に残る〕や〔生への志向〕が見られた。死への不安や恐怖を抱きつつも、親から高齢者自身へ、高齢者から子どもへ、そして配偶者といった重要な他者との繋がりを感じ、次の世代に何か引き継がれていくといった感覚を支えていると考えられる。また生のイメージに関しても、沖中 (2006) が指摘するように重要な他者との関係の中で捉えていることから、重要な他者との繋がりや故人との繋がりを感じるものが生と死を連続したものとして捉え、さらにこれからどのように生きたいかといったことに視点を向けていると推測される。以上のことから、高齢者にとって重要な他者との間で、繋がりを感じることであの世への肯定的態度や、後世に何かを残すとといった死のイメージを抱くだけでなく、さらに生きることに對しても考えようとするのが考えられる。

しかし、「(近親者を看取った際に遺体が)御書の通りに軽くなって、柔らかくなった。信心した通りになった(対象者 C)」のように、信心している宗教や信仰から影響を受けたと明言している場合や、それを示唆する語が見られた。日本人の場合、信心する宗教の有無に関わらず土着の自然宗教や民間信仰からの影響を暗黙裡のうちに受けており、少なからず死のイメージにも影響を与えており、特に高齢者の場合その傾向が顕著である (川島, 2005) ことから、高齢者と宗教および信仰は密接な関係が推測される。宗教の信心や信仰が死のイメージに与える影響は未だ一致した見解は得られていないが、それによる影響が本研究でも示唆された。そのため宗教や信仰による影響も考慮した検討も必要である。

引用文献

- 青木邦男 (2000). 在宅高齢者の死に対する意識の構造と加齢による変化 山口県立大学社会福祉学部紀要, 6, 77-86.
- Erikson, E. H., Erikson, J. M. & Kivnick, H. Q. (1986). *Vital involvement in old age*. New York: W. W. Norton.. (エリクソン, E. H., エリクソン, J. M. & キヴニック, H. Q. 朝長正徳・朝長梨枝子 (訳) (1990). 老年期—生き生きしたかわりあい— みすず書房)
- 針金まゆみ・河合千恵子・増井幸恵・岩佐 一・稲垣宏樹・権藤恭之・小川まどか・鈴木隆雄(2009). 老年期における死に対する態度尺度(DAP) 短縮版の信頼性ならびに妥当性 厚生の指標, 56, 33-38.

- 彦 聖美・田島裕佳 (2011). 高齢者がとらえる生と死に関する文献検討 ホスピスと在宅ケア, **19**, 42-49.
- 平川仁尚・益田雄一郎・葛谷雅文・井口 昭久・植村和正 (2006). 終末期医療・看護に関する授業と医学生の死生観との関係 日本老年医学会雑誌, **44**, 247-250.
- 堀 薫夫 (1996). 高齢者の死への意識と死への準備教育の可能性に関する調査研究 日本社会教育学会紀要, **32**, 86-94.
- 堀江宗正 (2007). 心理学的死生観の展開 宗教研究, **4**, 1011-1012.
- 伊藤孝治・永崎和美・一柳美稚子 (1991). 老人の死生観の傾向 愛知県立看護短期大学雑誌, **23**, 101-111.
- 伊藤孝治・松岡広子 (1993). 愛知県在住の老人と看護婦の死生観 愛知県立看護短期大学雑誌, **25**, 29-34.
- 川島大輔 (2005). 老年期の死の意味づけを巡る研究知見と課題 京都大学大学院教育学研究科紀要, **51**, 247-261.
- 河合千恵子・下仲順子・中里克治 (1996). 老年期における死に対する態度 老年社会科学, **17**, 107-116.
- 木内千晶・吉田千鶴子 (2004). 高齢者の希望する終末期の迎え方 岩手県立大学看護学部紀要, **6**, 77-82.
- 近藤 恵 (2010). 関係発達論から捉える死 風間書房.
- 小谷みどり (2008). 中高年の死観：自己と大切な人の死観の比較 日本家政学会誌, **59**, 287-294.
- 黒田研二・青木信雄・井上 学・久泉広子・山田尋志・秋山正子 (1994). 老人の死生観とその関連要因 老年社会科学, **15**, 166-174.
- 前盛ひとみ・岡本祐子 (2008). 重症心身障害児の母親における障害受容過程と子どもの死に対する捉え方との関連 心理臨床学研究, **26**, 171-183.
- 内閣府(2012). 高齢社会白書 2013年1月26日以下の URL を参照
 <<http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/index-w.html>>
- 沖中由美 (2006). 身体障害をもちながら老いを生きる高齢者の自己ラベリング 日本看護研究学会雑誌, **29**, 23-31.
- 酒井陽子 (2008). 入院した高齢患者の自らの生(死)に対するイメージの実態 事前に自分の生き方を自己決定できるための支援のあり方 国立病院看護研究学会誌, **4**, 20-24.
- 杉山善朗・方波見康雄・中野 修・阿部一男・竹川忠男・中村 浩・佐藤 豪 (1986). 高齢者の生き方の質(quality of life)と「死生観」の関連性についての研究 老年社会学, **24**, 52-66.
- 田中愛子・岩本晋 (2002). 老年期に焦点をあてた死生観・終末期医療に関する意識調査 山口県立大学看護学部紀要, **6**, 119-125.
- 吉田千鶴子(2010). 高齢者が考えるエンドオブライフ期の迎え方—エンドオブライフ期への支援システム構築をめざして— 豊橋創造大学紀要, **14**, 95-110.